

蟻通

世阿弥作

ワキ
紀貫之
シテ
蟻通明神
季は
地は
和泉
雜

「和歌の心を道として。／＼。玉津島に参らん。

詞 「是は紀の貫之にて候。我和歌の道に交はるといへ

ども。いまだ住吉玉津島に参らず候ふ程に。唯今

思ひ立ち紀の路の旅にと志し候。

「夢に寐て。現に出づる旅枕。／＼。夜の関戸の明暮に。都の空の月影を。さこそと思ひやる方も。雲井は跡に隔たり。暮れ渡る空に聞ゆるは。里近げなる鐘の声。／＼。

「あら笑止や。俄に日暮れ大雨降りて。しかも乗りたる駒さへ伏して。前後をわきまへず候ふは如何に。灯暗うしては数行虞氏が涙の雨の。足をも引かず駆行かず。愚意如何すべき便りもなし。あら笑止や候。

「瀟湘の夜の雨しきりに降つて。遠寺の鐘の声も聞えず。何となく宮寺は。深夜の鐘の声。御灯の光などにこそ。神さび心も澄み渡るに。社頭を見

れば灯もなく。すゞしめの声も聞えず。神は宜禰
が習はしこそ申すに。宮守一人もなき事よ。よ
しく御灯は暗くとも。和光の影はよも暗からじ。
あら無沙汰の宮守どもや。

ワキ詞
「なふく其火の光に付いて申すべき事の候。

シテ詞
「此あたりには御宿もなし。今少し先へ御通りあれ。

ワキ
「今の暗さに行く先も見えず。しかも乗りたる駒さ
へ伏して。前後を忘じて候ふなり。

シテ
「さて下馬は渡りもなかりけるか。

ワキ
「そもそも下馬とは心得ず。こゝは馬上のなき所か。

シテ
「あら勿体なの御事や。蟻通の明神とて。物とがめ
し給ふ御神の。かくぞと知りて馬上あらば。よも
御命は候ふべき。

ワキ
「是は不思議の御事かなさて御社は。

シテ
「此森の内。

ワキ
「実にも姿は宮人の。

シテ 「ともしの光の影より見れば。

ワキ 「実にも宮居は。

シテ 「蟻通の。

地 「神の鳥居の二柱。立つ雲透に。見ればかたじけな
や。実にも社壇の有りけるぞ。馬上に折り残す。
江北の柳陰の。糸もて繫ぐ駒。かくとも知らず神
前を。恐れざるこそはかなけれ。く。

シテ詞 「さて御身は如何なる人にて渡り候ふぞ。

ワキ詞 「是は紀の貫之にて候ふが。住吉玉津島に參り候。

シテ 「貫之にてましまさば。歌をようで神慮に御手向げ
候へ。

ワキ 「是は仰せにて候へども。それは得たらん人にこそ
あれ。我等が今と言葉の末。いかで神慮に叶ふべ
きと。思ひながらも言の葉の。末を心に念願し。
雨雲の立ち重なれる夜半なれば。ありとほしとも
思ふべきかは。

シテ

「雨雲の立ち重なれる夜半なれば。ありとほしとも思ふべきかは。面白しく。我等叶はぬ耳にだに。

おもしろしと思ふ此歌を。などか納受なかるべき。

「心に知らぬ科なれば。何か神慮に背くべきと。

シテ
「万の言葉は雨雲の。

ワキ
「立ち重なりて暗き夜なれば。

シテ
「ありとほしとも思ふべきかはとは。あら面白の御歌や。

地
「凡そ歌には六義あり。是れ六道の衢に定め置いて。六つの色を見するなり。

地
「されば和歌のことわざは。神代よりも始まり。今人倫に普し。誰か是をほめざらん。中にも貫之は。御書所を承りて。古今までの。歌の品を撰びて。喜びを延べし君が代の。直なる道を顯はせり。

クセ
「凡そ思つて見れば。歌の心すなほなるは。是以て私なし。人代に及んで。甚だ起る風俗。長歌短

歌旋頭。混本の類是なり。雑体一つにあらざれば。

源流漸く繁る木の。花の内の鶯。又秋の蟬の吟の
声。いづれか和歌の数ならぬ。されば今之歌。我
邪をなさゞれば。などかは神も納受の。心に叶ふ
宮人も。

シテ
「かゝる奇特に逢坂の。

地
「関の清水に影見ゆる。月毛の此駒を。引き立て見
れば不思議やな。もとの如くに歩み行く。越鳥南

枝に巣をかけ。胡馬北風にいばえたり。歌に和ら
ぐ神心。誰か神慮の。まことを仰がざるべき。

ワキ詞
「宮人にてましまさば。祝詞を読うて神慮をすゞし
め御申し候へ。

シテ詞
「承り候。いでく祝詞を申さんと。神の白木綿か
けまくも。

ワキ
「同じ手向と木綿花の。

シテ
「雪を散らして。

ワキ 「再拝す。

シテ 「謹上再拝。敬つて白す神司。八人の八乙女。五人の神楽男。雪の袖を返し。白木綿花を捧げつゝ。神慮をすゞしめ奉る。御神託にまかせて。猶も神忠を致さん。有難や。そもそも神慮をすゞしむる事。和歌よりも宜しきはなし。其中にも神樂を奏し乙女の袖。返すぐも面白やな。神の岩戸のいにしへの袖。思ひ出でられて。和光同塵は結縁の始め。

ワキ 「八相成道は利物の終り。

シテ 「神の代七代。

ワキ 「すなほに人あつうして。

シテ 「情欲分つ事なし。

地 「天地開け始まりしより。舞歌の道こそすなほなれ。

シテ 「今貫之が言葉の末の。

地
「今貫之が言葉の末の。妙なる心を感じる故に。仮
に姿を見ゆるぞとて。鳥井の笠木に立ち隠れ。あ
れはそれかと見しまゝにて。書き消すやうに失せ
にけり。貫之も是を悦びの。名残の神楽夜は明け
て。旅立つ空に立ち帰る。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹著